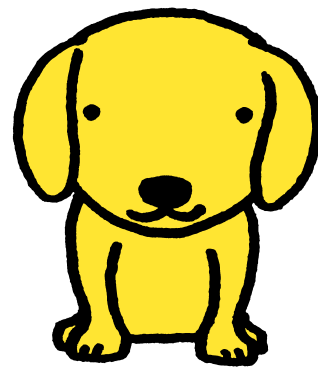


# NEWS LETTER



NO.23

2006.1.30

発行：にほんごひろば岡本

〒658 - 0003 神戸市東灘区本山中町 4 - 18 - 22

☎078 - 453 - 5931

<http://www.kabto-yama.ac.jp/hiroba/>

## にほんごひろば岡本

# 春

はまだまだのようで、厳しい寒さが続く毎日ですが、ここ「にほんごひろば岡本」は学習者とその支援者の熱気で、寒さも吹っ飛ばすような雰囲気です。

最近の新しい流れとしては、韓国、中国、ベトナム、インドネシア、タイからの留学生とその家族、派遣社員の方が多くなっていることがあげられます。また日本人男性との結婚で来日した女性、小学生から高校生までの子供たちの学習者も増えていきます。



ひとりひとりのニーズに合った学習ができるようにと、プライベート

レッスンの形をとっていますが、なかなかうまくいかない難しいことも沢山あります。

支援者の皆さんは、色々と創意工夫をかさねてくださっています。教材選びや手作りの教材で

学習者の意欲を引き出し、効果をあげている方々がいます。持ち前の特技や趣味を生かして日本

文化の紹介をし、楽しい時間を共有している人たちがいます。

支援者の熱意に<sup>しえんしゃ ねつい こた</sup>応えようと<sup>がんば</sup>頑張っている<sup>がくしゅうしゃ みな</sup>学習者の皆さんがいます。

ひろばが<sup>お</sup>終わって<sup>かえ</sup>帰る時、<sup>とき</sup>どんなに<sup>つか</sup>疲れていても、<sup>さわ</sup>爽やかな<sup>きも</sup>気持ちになり、<sup>げんき</sup>元気が出るのは、そ  
んな<sup>がくしゅうしゃ しえんしゃ</sup>学習者と<sup>すがた</sup>支援者の<sup>ゆうき</sup>姿に<sup>おも</sup>勇気づけられるからだと思います。「にほんごひろば岡本」のおかげで、  
このような<sup>よろこ</sup>喜びを<sup>あじ</sup>味わえることを<sup>かんしゃ</sup>とても感謝しています。

「にほんごひろば岡本」には、<sup>くる</sup>かた<sup>くろ</sup>苦しいルールなどありません。

<sup>にほんごがくしゅう</sup>日本語学習を<sup>ちいき りんじん</sup>とおして「地域の隣人」として<sup>つ あ</sup>お付き合いできる<sup>かんけい きず</sup>関係が<sup>ちいき にほんご</sup>築けたら、「地域の日本語  
<sup>きょうしつ やくわり は</sup>教室」の<sup>おも</sup>役割は<sup>おも</sup>果たせると思っています。

“<sup>き お</sup>気負わず、<sup>きな</sup>気長に、<sup>たの</sup>楽しく！”<sup>かつどう つづ</sup>活動を続けていきましょう。

<sup>ことし</sup>今年もどうぞ、<sup>ねが</sup>よろしく<sup>ねが</sup>お願いいたします。

(<sup>にしむらよしこ</sup>西村佳子)

### 特別寄稿

## 言葉にすれば失われる“もの”

<sup>まごた</sup>佐古田 <sup>きぶろう</sup>三郎

<sup>じかん</sup>時間や<sup>ことば</sup>言葉について、<sup>じつ</sup>実を<sup>い</sup>言えば<sup>わたし</sup>私たちは<sup>ちゅうい</sup>あまり<sup>はら</sup>注意を<sup>こ</sup>払って<sup>わたし</sup>来なかった。それらは、<sup>わたし</sup>私たち  
<sup>しゅうい</sup>の<sup>な</sup>周囲あるいは<sup>ものごころ</sup>その中に、<sup>とき</sup>物心ついた<sup>そんざい</sup>時から<sup>しこう</sup>存在していたので、<sup>たいしょう</sup>思考の<sup>の</sup>対象から<sup>のが</sup>逃れていたとも  
<sup>かんが</sup>考えられます。もし、<sup>よ</sup>この世に、<sup>ひとり</sup>たった一人<sup>い</sup>で<sup>とけい</sup>生きていたならば、<sup>きざ</sup>時計で<sup>じかん</sup>刻まれる<sup>ひつよう</sup>時間は必要で  
しょうか？ <sup>ことば</sup>言葉はどうでしょうか？ <sup>たぶん</sup>多分、<sup>ひつよう</sup>必要ないでしょう。<sup>わたし</sup>私たちが、<sup>しゅうだん</sup>集団となり<sup>だんたいかつどう</sup>団体活動  
をするようになって、<sup>だれ</sup>誰にも<sup>きょうつう</sup>共通な<sup>じかん</sup>時間や<sup>でんたつ</sup>伝達すべき<sup>しゅだん</sup>手段としての<sup>ことば</sup>言葉が<sup>ひつよう</sup>必要になったと<sup>かんが</sup>考えら  
れます。今日は、<sup>きょう</sup>言葉について<sup>ことば</sup>一緒に<sup>いっしょ</sup>考えて<sup>かんが</sup>みましょう。

<sup>みきこ</sup>幹子という<sup>じんぶつ</sup>人物の<sup>なまえ</sup>名前を<sup>れい</sup>例に<sup>め</sup>して<sup>と</sup>みます。では、<sup>かのじょ</sup>眼を<sup>なまえ</sup>閉じて<sup>くち</sup>彼女の<sup>くち</sup>名前を<sup>くち</sup>口にして<sup>くち</sup>みてください。

<sup>いちぶ</sup>一部の方には、<sup>かた</sup>時間を<sup>じかん</sup>越えて<sup>こ</sup>様々な<sup>さまざま</sup>思いが<sup>おも</sup>心<sup>こころ</sup>に<sup>しょう</sup>生じるでしょう。一方、<sup>いっぽう</sup>残りの方には<sup>のこ</sup>何も<sup>かた</sup>心<sup>な</sup>に<sup>こころ</sup>生

じないでしょう。後者の場合は、言葉は単なる伝達すべき術（すべ）でしかありません。前者は、標準化された言葉では伝えられない“何か”を伝えています。しかし、伝えられた“何か”はそれぞれの方で異なると思います。皆さんの中のこの違いを表現するために、絵、詩、音楽といった芸術が存在すると考えても良いでしょう。

もう一つの例で、より一般化された議論をしてみます。ある人（彼？）がたった一人で、森に暮らしているとしましょう。必要ないので彼には言葉は存在しません。ある木は寝場所、ある木は木の実を食べる食事の場所、ある木は見晴らし展望台としての場所、ある木は冒険と運動の場所など、彼には木はとても重要な存在です。木という言葉でこれらをまとめて表現すれば、彼にとって全く意味の異なる“木”が標準化されてしまいます。勿論彼は、視覚情報から、それらが似た形態であることは承知しているはずですが、彼にとってそれらは決して同一のものではないのです。これほど豊かな広がりを持った彼の“木”を伝えるのは簡単なことではありません。

私たちの周囲にある全ての“もの”（人を含む）は、私たちと付き合いのある限り、様々な属性を有して私たちの目の前に存在しています。しかし、会議やテレビなどで議論されるときは、全ての“もの”の属性は失われています（全ての人に共通な“木”という言葉が使用されている）。属性が存在しては、共通の議論が成立しないので無理もないところです。

多くの属性を包括した“もの”を語るということが、本当の意味での私たちのコミュニケーションではないかと私は考えます。この場合、標準化された言葉を比喩的に使用し、“何か”を伝えることになるかもしれません。

例えば、私の家内（幹子）が持っていた鍵は私にとって単なる鍵ではないのです。

「傷ついた 君のキーホルダー 眺めれば 遠い思い出 ふわり広がる」

つね ひょうじゆんが 常に標準化されない“何か”をいしき意識し、ひょうげん表現しようとするれば、だれ誰も



じぶんを見失わず自  
己の更新をぬること  
ができます。そうなれ  
ば、真の異文化共生  
としての“にほんごひ



ろば岡本”が皆さんの前に出現するという気がしま

す。

しえんしゃ がくしゅうしゃ  
**支援者・学習者のひろば**

ふじもと のりこ  
**藤本紀子**

さん、余冠  
賢さんゴ  
ールイン!



2002年か  
らひろばに  
参加してお  
られた藤本

さんと学習者の余さん(台湾出身)が11月15日  
にめでたく結婚されました。式は台湾と神戸の2  
カ所で行われました。

ひろば代表の西村さんも披露宴に招待されま  
した。素敵なスピーチをされ、お2人ともとても  
喜んでおられました。ひろば第1号のカップル  
誕生です。お幸せに!!

**ラティフさん、インドネシアへ帰国**

春岡恵子さんと土曜日に学習していたラティ  
フさん(神戸大学留学生)勉強を終えて、2月、  
インドネシアに帰ります。

彼は昨年12月の年忘れお楽しみ会でのスピー  
チ大会で、インドネシアの素晴らしさを写真とと  
もに話してくれましたね。支援者の春岡さんのま

るで「わが子」を見るようなまなざしが印象的  
でした。(9ページ写真)

ラティフさん、現地からの「インドネシアだよ  
り」を待っていますよ。お元気で。

**アレイ君、インドネシアへ帰国**

坂本喬子さんと土曜日に学習していたアレイ  
君、お母さんとお国へ帰りました。

アレイ君、インドネシアへ帰っても日本やひろ  
ばを忘れないでね。

**金さん(韓国出身) 神戸松蔭女子学院大学で  
講演!**

2005年11月17日、金キョンスさんが神戸松蔭  
女子学院大学の日本語教育学科の学生にお話を  
してくださいました。

金さんは、大阪・心斎橋にある韓国領事館で働  
いておられます。日本語の勉強は日本に来てから  
始められたそうで、「大変だった」とおっしゃっ  
ていました。

最近、日本中で韓流ブームが起っています。  
特に女性の間では、それを金さんも、「喜ばしい  
ことだ」とおっしゃっており、同時にこう分析さ  
れていました。韓国の男性が日本人の女性にもて  
る理由その1、タフであること。韓国の男性は二



年間の兵役が義務付けられています。これにより心身共にたくましくなるのです。その2、愛情表現が豊かであること。これは映画やテレビを見てもお分かりになるように、韓国の男性はきちんと相手に気持ちを言葉で表現します。これは日本人男性が苦手とするものなのではないでし



ようか。また、日・韓の文化については、韓国の食文化が日本でも馴染みのあるものになってきたこと。逆に韓国では日本と同じ音の言葉があります。例えば、無理、都市、土地、図書館、文化、動物。これらは中国から伝わった漢字語なので、日本で使われているように韓国でも同じ音で使われるようになったと考えられます。また韓国には、日本の「わいうえを」などの古い発音のように、韓国にも今は使われてない言葉があります。それが日本語と似ているとも言われています。

女性の社会進出が自覚ましい今、韓国でも働く女性が増えているそうです。これは、日本も同じことが言えますね。

一番興味深かったのは、やはり歴史問題。ある時、金さんが日本人の若者に「なぜ韓国はいまだに過去のことにこだわっているのか」という質問をされたそうです。これを聞いて金さんはア然としたそうです。「なぜそんなことが言えるのか」と。なぜならば、韓国では学校で、日本に侵略されていた時代のことを徹底的に教わると

いいます。だから、韓国人はどこかで被害者意識を持っているそうです。少し偏った教育かもしれませんが、と金さん自身もおっしゃっていましたが、それも今まであった歴史上のことを忘れてはならない、ということではないでしょうか。一方、日本では、ここまで集中的には教わらなかったのではないのでしょうか。戦争や侵略した時代のことを深く掘り下げるような授業はなかったと思います。ここが両者の違いではないでしょうか。

しかし、金さんはこうもおっしゃっていました。「韓国と日本は隣国である。過去の歴史問題から前に進まなくてはいけない」と。

ここで勘違いしてはいけないのは、『前に進む』ということの本当の意味だと思います。決して過去をなくすというような意味ではなく、してしまった事を悔いて、反省し、もう二度とこんなことをしてはいけないと思うことではないでしょうか。戦いからは何も生まないのですから。

2002年日・韓ワールドカップの年、韓国が他の外国と試合をしているとき、多くの日本人が応援をしたそうです。また、日本が他の外国と試合をしているときは、韓国人は日本を応援したそうです。

このようなとき、私たちはアジアの一員であることを強く思うのではないのでしょうか。日・韓共に、文化や考え方の違いはありますが、同じ人間であることには違いない、ということを金さんの講演で改めて思いました。

金さん、どうもありがとうございました。

(神戸松蔭女子学院大学 若野優)

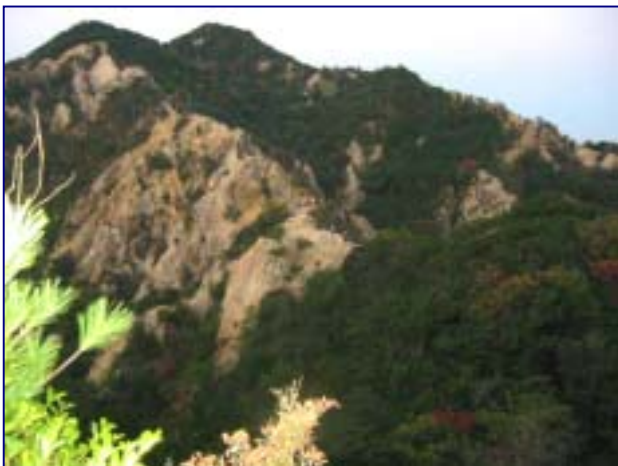
三木(旧姓古川)千津子さん・村上祐子さん、  
六甲全山縦走登山に初挑戦！みごと完走！！

これは神戸市の主催で毎年11月に2回行われる登山大会で、申し込めば先着2000人まで、誰でも参加できます。

須磨浦公園をスタートし、鉢伏山 高取山 菊水山 摩耶山を登り六甲山上を歩いて最後は宝塚に下山する全長約5.7kmの道のりを18時間以内に完走するというイベントです。

私と村上さん、そして会社の友人5人が集まり、合計7人で参加しました。全員登山は初心者でこの大会にも初参加でした。特に私は普段あまり運動もしていなかったせいか、事前に行った登山の練習で膝を痛めてしまい、かなり不安な当日を迎えました。

05年11月23日、大会当日は午前5時にみんなで須磨浦公園をスタートしました。まだ辺りは真っ暗で、ヘッドライトをつけて登り始めました。登り始めて2時間くらい、最初の難関の「馬の背」と呼ばれる細い崖を渡るあたりでやっと夜が明けてきて明るくなってきました。このあたりから仲間とはぐれてしまい、ひとりになってしまいましたが、周りにいた他の参加者の人たちと話しながら自分のペースでゆっくり歩いたのが良かったのか、練習よりも早くコースの半分の地点、掬星台まで到着しました。この前半のコースは高い山がいくつ



もあり、特に菊水山は急な階段が延々と続く厳しい山として有名です。練習では一度もコースの半分を歩ききったことがなかったので、自分でもペースの速さに驚きました。ここで、昼食をとって少し休憩をした後から、急に膝が痛み出し、残りの半分は膝の痛みとの戦いでした。でもここまできてリタイアするのがどうしても嫌で、足をひきずりながら何とか六甲山頂付近まできて、残りは

宝塚を下山するという地点で暗くなってきました。時間は17時前。後半は膝の痛みと疲労で、景色を眺める余裕もなく歩くのがやっとの状態になっていました。



残り13kmの下山は思いのほか厳しく、足元には大きな石がたくさん転がっている足場の悪い山中をヘッドライトの明かりだけを頼りに歩くのはとても怖かったです。この地点では、参加者の人たちもバラバラになり、リタイアする人もたくさん出てきていました。たまに参加者に会っても、すぐに追い越されていってしまうので山の中では本当にひとりになってしまうこともありました。携帯電話も圏外で、先を歩いていた村上先生や他の友達に連絡をすることも出来ず、リタイアすることも出来ず、泣きそうになりながらひたすら歩くこと4時間でやっと山を抜け阪急宝塚駅前のゴールに到着した時は、何とも言えない感動がありました。

先に着いていた村上さんたちが、ゴールで出迎えてくれて、一緒に抱き合って喜びました。なんと、初参加にもかかわらず、全員が完走したということで、ボランティアの方々がビックリしていました。初参加で完走する人はあまりいならしく、ほとんどの人が2~3回目の挑戦でやっと完走出来るそうです。

私は16時間、村上さんは14時間で完走しました。

完走者には小さな楯と表彰状がもらえます。

コン  
ディ  
ションの  
悪い中、  
57kmを1  
日で完  
走出来  
たこと  
は、自分



でも信じ  
られない  
し、私にも  
まだこん  
な体力と  
根性があ  
ったのか

と正直、自信もつきました。大人になるとなかなか自分の限界に挑戦するような機会がない中で、いい刺激になったと思います。

みなさんも機会があれば一度、六甲全山縦走登山に参加してみてもいいいかがですか？

私は、頂いた楯を眺めながら、「2つはいらん」と思っていますが(笑) 1つ手に入れれば、必ず自分の中で何かが変わるはずですよ！

(三木千津子)

### みんなのひろば

#### バーベキューパーティー

(2005年10月22日 芦屋奥池遊びの広場)

この日は今冬の寒さを予感させるような、寒い一日でした。



終了まで、なんとか空は持ってくれました。総勢50名以上の参加で、食べて飲んで遊んでゲームして、学習日が違う人ともいろいろお話をしながら楽しい秋の一日でした。

ステップアップ講座(2005年10月29日～11月26日・毎週土曜日計5回)

日本語学校の教師を講師にお迎えして、46名の参加で勉強会を行いました。和気藹々の中「みんなの日本語初級」を使って、いろいろな例文を作り、時にはその例文から脱線し、講師の先生もタジタジでしたよ。



それでも、初めて参加された方は、とても参考になったとの感想をいただきました。最終日には、講師の先生も参加していただき、交流会も行いました。

今期も行う予定ですが、みなさんの意見も考慮して、連続ではなく、もっとたくさんの方の参加しやすい方法を考えております。



### としわす たの かい あらた 年忘れお楽しみ会 (クリスマスパーティー 改め)

ねん がつ にち  
2005年12月18日

2005年の最後を飾る大イベントは 12月18日、ひろばの向かいの愛甲法科専門学校で開かれました。支援者、学習者やその家族、友人も沢山参加して、総勢65名の大パーティーになりました。

今年も例年のように、食べ物、飲み物を支援者の方々が沢山用意してくださり、市川さん手作りのフラワーアレンジメントもテーブルを飾り、華やかな雰囲気になりました。



まずは下田副代表の乾杯で、お腹を満たし、しばし歓談タイム。しかし、その後、予定されている学習者による「スピーチ大会」の出場者は、かなり緊張しているようでしたよ。しっかり食べましたか？ 少々お気の毒でしたね。





さあ、  
いよ  
いよ  
「ス



ピーチ大会」です。今回から、この大会は「佐古田



幹子杯  
」と  
銘打  
って、  
出場  
には  
奨学



金が、また最優秀者にはトロフィーが授与されることにな  
りまし。

NEWS LETTER の No.20 でもお知らせしました、にほん  
ごひろば岡本の支援者であった佐古田幹子さんの絵や  
版画・写真の遺作集の売上金の一部をご主人である佐古田  
三郎氏によってご寄付いただきました。その寄付金をスピ  
ーチ大会の奨学金として使わせていただきました。当日  
は佐古田三郎氏にも来ていただき、参加者11名、緊張あ



り、ユーモアありの素敵なスピーチの連続でした。自国の紹介を写真などを使って話してくれたり、パートナーの家族に初めて挨拶に行った時のことを臨場感たっぷりに話してくれたり、「大阪弁」を吉本に推薦できるぐらいの語りで会場を笑いの渦に巻き込んだり、「親孝行の大切さ」を一生懸命話してくれたり、どのスピーチも甲乙つけがたい素晴らしいものでしたよ。

最優秀者はタイ出身の山中ラーワンさんでした。後ろに彼女のスピーチを載せていますので、ご覧ください。シャイなご主人が彼女のスピーチ中、カメラを向け、真剣な顔をしていたのをカメラに収めましたよ。ラーワンさん、本当におめでとうございます！

スピーチ大会の審査の時間を使って、山口さんの素敵なケーナの演奏、さらにケーナで伴奏までお願いして全員で「涙そうそう」を歌いました。さらに「世界に一つだけの花」をバックに輪になって踊っちゃいました。そこで、ハプニングです！なんとヴィットさんのブレイクダンスが始まりました。みんな大喜びですが、さすが一緒にはできません！せめて手拍子で大喝采でした。ヴィットさん、番外の特別賞まで獲得しました。

最後は「誰が持っているのゲーム」や「チャンバラゲーム」などいろいろなゲームで楽しみましたよ。「椅子取りゲーム」ではスピーチ大会で最優秀をとったラーワンさんが最後まで残って、大活躍でした。優勝はピンさんでした。

楽しいパーティーも予定時間を大幅にオーバーして午後5時、お開きとなりました。竹中副代表の指導で、年末の挨拶をみんなで言って1月の再会を約束しながら、別れていきました。



### スピーチ大会出場者の紹介（発表順）

ピンさん（ベトナム出身）

「新年に食べるベトナム料理」

揚げ春巻きの作り方や蓮の花のデザートを紹介してくれました。ピンさん、日本語、子ども（3歳）に負けないようにね。



シャブル ラティフさん(インドネシア出身)

「ベンキョウチュウになはしたこと」

短い日本留学でしたけど、日本の温泉に入ったり浴衣を着たり、沢山交流をした様子がよく分かりました。インドネシアでは見れない「雪」を見に北海道に行けましたか？



キュットさん(ベトナム出身)

「私の国ベトナム」

ベトナムはとてもきれいな国で、昔は漢字を使っていたとか、実は中国語よりも多い「6声調」の言語であることを教えてくださいました。なかなか区別がつかなくて、それぞれ意味が違うなんて大変ですね。そんな言葉にも触れたいので是非行ってみたいとなりました。



グエン バオ クオックさん(ベトナム出身)

「私は日本が非常に好きです」

日本での農業体験を通じて日本文化が大好きになったそうです。日本人も大好きだと言ってくれましたね。ありがとう。



ウォン ヨンジュンさん(韓国出身)

「韓国のお祝い」





韓流ブーム以外の韓国文化をもっと知って欲しいと、子どものお祝いについて話してくれました。100日目のお祝いは、子どもだけでなく、恋人同士も行うそうです。日本でも流行るかな？

### ウィリアム マーカンドさん(イギリス出身)

#### 「大阪弁」

「ぼちぼちでんなあ、あかん、ごっつきれいやな、おおきに、どんくさい・・・」、大阪弁はいいリズムとイントネーションなので、もっと使いたいと言っていましたね。大好きな大阪弁で彼女と仲良くしてくださいね。



### インドラ フィルマンシャさん(インドネシア出身)

#### 「日本に来てわたしが思ったこと」

ひろばの七夕で茶道や書道を体験し、とても興味深かったようです。日本は文明国で京都の紅葉には感動したそうです。



### ファム ゴツ パオ ラム君(ベトナム出身)

#### 「今、行きたい国はどこ？」

日本に来て3年目の中学生のラム君、今はアメリカに行きたいそうです。アメリカや日本、中国の長所短所を見事に分析していました。世界中で活躍してくださいね。



やまなか  
山中 ラーワンさん(タイ出身)

「気になること、びっくりしたこと」

さいゆうしゅうしゅう  
最優秀賞おめでとうございます。これからもタイと日本のご両親に親孝行して下さい。(スピーチの原稿は11ページ)



ブル スコットさん(カナダ出身)

「こくさいけっこん」

じょうだん はじ じょうだん お  
冗談で始まり冗談で終わった、とても楽しいスピーチでした。ビデオの「古畑任三郎」や「ナースのお仕事」で日本語の勉強しているそうです。彼女(もとこさん)の家に結婚の報告に行ったときのことを、面白く話してくれました。「いずみちゃん」より「もとこさん」最高ですよ!!



ラハール バリワンギさん(インドネシア

出身)

「わたしの好きなもの」

にほんしょく だいす かにしまで  
日本食が大好きなラハールさん、鹿児島で「そば打ち体験」をして、出来上がったのはそばではなくて「うどん」だったそうですよ(笑)。さらに京都の嵐山で紅葉を見て俳句まで披露してくれました。



あかもみじ ころやす  
ぎ しあわせだ  
お見事!!  
は欠番です。



「**気になること、びっくりしたこと**」

やまなか  
**山中ラーワン**



こんにちは、タイから来ましたラーワンと申します。2003年の5月に日本へきました。私の住んでいたタイは1つの季節しかない国ですが日本は4つの季節があるので、なれるまでとても大変でした。日本に来る前に日本についての本を少し読みました。日本の人口はタイの2倍です。それにひきかえ面積はタイの2分の1である事を知って、どのような生活をしているのか楽しみにしてきました。きてみると最初にタイと違うところを感じたのは山の上に沢山の家が建っていて、それだけでなく海の上にまで家と工場が沢山あって驚かすにはいられませんでした。さらにびっくりしたのは日本人は1日の大半を働いて過ごします。休日出勤の場合も少なくないようです。タイ人がもし日本人みたいに一生懸命働き、まじめならば間違いなく10年後日本と同じように発展しているとおもいます。タイ人から見ると日本人は、素晴らしいと思っています。日本に住んで1年位経った時日本人の友達ができ仕事もするようになりました。おかげさまで毎日楽しく暮らしています。

ところが、一つ気になることがあって、いまだに納得できません。それは日本の若い人は親が子供を育てるのは当然とされていて親孝行しなくてもいいと思っている人が多いようです。また、親の立場の人に聞いてみると、1歳から5歳位までの子供の笑顔で十分親が楽しめたから、これが親孝行だという人もいました。たしかに、タイの親も子供からは何も欲しくない、健康で他人に迷惑をかけないことだけを望んでいます。しかし、子供が親孝行しなくてもいいという考えは間違っているのではないのでしょうか。

私の考えでは、まず親孝行したいという気持ちが一番大事だと思います。人はそれぞれですからどんなやり方でも良いと思います。私は、15歳から兄と一緒に親元を離れバンコクで勉強をしました。親に1年に1回しか会えなくて、とても寂しかったです。その代わりに母に週3、4回位電話をしていました。面倒くさい、もったいないと思う人ももちろんいますが、電話で話す時、私よりずっと嬉しいのは間違いなく母のほうだったと思います。だから日本にきた今でもずっと続けています。

日本人と結婚すると家族に話した時にみんなが一番心配したのは主人の両親と仲良くできるかどうかという事でした。日本にきて驚くほど主人の両親が私を大切にしてくれていつも暖かい気持ちになって、とても幸せです。だから私は主人の両親も自分の親と同じように大切にしようと心がけています。

日本は今年で3年目ですが、まだまだ、分からない事が沢山あります。これからもよろしくお願ひします。最後に私の話を聞いてくださり、ありがとうございました。

**CONTENTS**



**特別寄稿 言葉にすれば失われるもの 佐古田三郎さん.....2**

**支援者・学習者のひろば.....3**

「ひろば」からのカップル第一号ゴールイン

金さん女子大で講演

古川さん、村上さん六甲全山縦走みごと完走！

**みんなのひろば.....5**

BBQパーティー・ステップアップ講座

**年忘れお楽しみ会.....6**

**スピーチ大会.....8**

【編集後記(へんしゅうこうき)】2006年(ねん)最初(さいしょ)のNEWS LETTERです。今回(こんかい)は、学習者(がくしゅうしゃ)のみなさんにも是非(ぜひ)読(よ)んでいただきたくて、総(すべ)て振り仮名(ふりがな)をふりました。今年(ことし)もいろんな行事(ぎょうじ)が目白押(めじろお)しですよ。(I・M)